「一體に越後美人は皮下脂肪の發達がよい、ムッチリとした彈力ある肌合で、色が白い。まことに挑發的に出來てゐる。丈は一體に低くて脚が短かい。顏は丸くてハッキリとせぬが、頭髪は多くして且つ長く、黑く、丈なす黑髪といふ形容詞は過褒でない。

「眼には人を惱殺するやうな危險性はないが、常に或る一方を、ポッとして注視る習性がある。これが爲遠來の客は、その瞳が已れに向けられたものと、忽ち羽化して登仙し、士俵際に至つて墜落、おや〳〵と云ふ喜劇は往々にある。彼の眼付は越後女には通有のものだから、餘り早合點せぬ方が好い。

「鼻は團子の系統に屬し、唇は稍や厚く、口はまた小さくない。この三點が人工淘汰によつて美化し得るならば、越後美人は先づ日本の美人中でも、相當の位置を占めることができるのだが、……

越後美人は肥つてをるのが難で、それが爲に表情の發露を少からず制壓される、且つ口が稍や大きいから、笑つてはカラ駄目だ。立てば脚の短かいのでぶち壞し、笑へ

の免許皆傳を受けて中京の名妓と云はれた小染、長吉や、又名古屋第一の美人と謳はれたいとなども、皆そこの所屬であつた。

京、大阪で舞妓、東京で「雛妓」のことを名古屋では「ふたついち」といふ、分數で呼ぶところは一寸おもしろい。

前の會話の中に出て來た八勝館といふのは、「名古屋の森林公園」と稱せらるゝ郊外八事山にある大きな料理屋である。室内の設備、調度、庖丁などは、兎に角として、あれだけの庭園と眺望とをもつてる料理屋は、殘念ながら東京にも大阪にも無かつた館の名も、尾・濃・參・勢・志・賀・飛・信八州の諸山一眸の中に落つといふ意味だとは大きい。

『名古屋へ行つたら、是非八勝館だけは行つて見給へ。』

私は然う云つて友人達にもすゝめた。

ば、脣でぶち壊す。

「越後美人は、飽く迄も無表情の靜的な美人である。膝の上に袂を重ねて、お手々をちやんと置いて、笑はず怒らず、唯だぼんやりとお容の顏を見詰めてゐるのが身上なのである。近頃新潟の花街にもしきりに、東京辯をきくやうになつたが、矢張り兄樽、お前樽、どうしなはれたネ。オレが心配も知らぬでサ、が似合つてるやうである。

「此の靜的で、而も挑發的な美人は、すべての點に於て冷靜である。彼等の大多數はプロ階級の家に人と爲たもので、具さに生活苦を嘗めてゐる。元來金が敵で身を沈めたのだから、金に對しては徹底的意見をもつてをる、金の前には命も投げ出すけれど、男振りやお世辭なんどには目を眩ませぬ。百年の馴染でも、金が無くなれば吉野紙のごとく、鼻をかんで棄てゝしまふ。薄情なのは決して吉原に於ける華魁のみでない、藝妓も亦その通りである。この極端なる拜金主義は抱へ主に喜ばれ、又己れを利するところも頗ぶる多い、――と。

以上は或る越後の男の「越後美人評」である、流石に精細を極めてゐる。私が新潟へ行つたのは三回、短かいのは一泊、長かつたので一週間、飲みには五六回行つたけれども五回や六回の觀察では、なかなか是れだけ思ひ切つた批評はできない。

『新潟に美人が多いと思ふのは、一種の迷信にすぎないね、新潟のどこに美人がゐる。花柳界に？　彼れ位の都會の花柳界となれば、何處だつて彼れ位の美人は集まつてゐるよ。新潟は花柳界を除いたら、何處に美人がゐる？　市街を歩いてみても、ちつとも美人に行當らないではないか。』

と、或る男が云つた。然し私は矢張り新潟は美人國であるとおもふ。反駁して曰ふ、

『そりや東京や大阪に較べたら、花柳界にも素人にも、確かに美人はすくなからう。然しながら五人なり七人なり集まつた藝妓に向つて、試みに「お前はドコだ」と聞いて見るがよい、悉く越後生れの女である。他國から來てをると云ふは殆んど居ない。この邊の趣きは東京や大阪とは、まるきり違つてゐる花柳界を地の女でかた

越後は昔から女が多かつた

越後女は働き嵜

めてゐるところが、何よりも美人の多い證據ではないのかね』と。

越後は「女の國」である。何ういふ譯か、越後は昔から女が多かつた。德川時代に、越後から未婚の女を募集して、女不足の土地に移住せしめて、男女平均を策し、人口增殖を圖つたやうな例もあつた。今日の茨城縣や福島縣は、いづれも越後から女を分けて貰つた方の國である。

女の多い結果は女に獨身者が多く、從つて越後の女は自ら働いて食ふことを、考へねばならなかつた。娼妓といへば直に越後の女が連想せらるゝまでに、彼等の多くは娼妓となつて各地へ出稼ぎした外に、長野縣下の製絲工場の工女の大半が越後女であることや、『ろく消よしか』と越後辯丸出しで藥を賣つて歩く旅支度の若い女が、各地に行亙つてをることも、世人のよく知つてる所であるが、越後の國内でも、女の「働き蟻」は有らゆる方面に亙つてよく働いてゐるのを見る。新潟へ行つた旅客は、新聞配達も、八百屋も、花屋も、氷屋も、紙屑屋も、豆腐屋も、三助も、その大半は女で

人妻稼業

京の系統を引いた越後美人

あるのを見受けるであらう。

薄情だと云はれる世評の因は、あきらめの好いことに發してゐるのではないか。諦めは越後女の通有の性質であるらしい、心中する女となり得ない代りに、毒婦ともならない。玄人から素人に復歸しても、玄人上りといふ風がすくない。玄人の時それを職業だとあきらめて、苦勞があつても自暴にならず、素人に戻つて人妻となれば、人妻として諦める、嫉妬も憍かなければ浮氣沙汰もない、極端に云へば人妻も職業なれば、藝娼妓も職業である、と云ふ風に考へて居るのではないか。

その容貌に於ても、性質に於ても、越後美人は京美人の系統を引いてゐる。京美人が土着して、こゝに特別の地方的發達を遂げたと、見るべき理由がある。其理由はこに論ぜぬが、新潟は古い船着場であると同時に、古い遊郷であつた、新潟市今日の繁榮は遊女に依つて築かれたと云つても、敢て過言ではない筈である。慶應頃流行つたといふ新潟名所節にいはく、

新潟名所はさまざまでさる、四方を見わたす日和山、沖の洲崎に出船入船、下町女郎衆に、島女郎衆、二三小意氣で、五六全盛。坂内小路のにぎやかさ、寺町通れば、コレサ阿兄尊寄りなれや。

名所が悉く遊廓とは、色の港の全盛ぶりをこの一首にうかがふことができる。——同時に、越後美人の「玄人氣質」も歴史的傳統的であることがわかる。

然し越後美人特有の一種の斜視は京美人は持合せてゐない。越後には、普通の女でも凉しい眼を持つたのは少いが、盲目の女の多いことは、少し注意深い旅客を驚ろかせるに相違ない。怪しむな、越後は昔から「替女」の本場なのである。原因は、海風強く砂塵を吹きまくるのと、冬季雪の反射から來てると云はれてゐる。

◇

日本全國いかなる土地の遊廓にも、越後女と伊勢女を見ぬところはない。神苑の櫻の花片を浮かして流れる五十鈴川の清い水に、柔かな肌を浸して育つた伊勢の女が、

肉を賣る女として擴がつて行つたのは、どうした事情であつたか。

——今は故人となつたSが、曾てこんな話をしたことを、私は今想ひ出す。「藝妓や娼妓を標準として（その方面にかけては、Sは可なりの猛者であり又通人でもあつた）云ふのですがね、謂ゆる江戸ッ兒と云つてる東京の女が、一番よくつて、又一番いけないやうですね。自分の惚れた客だと莫迦に力めるし、又直に達引をやりますね、寧ろそんなことを一種の見得にしてやるやうです、その代り厭な客だとなると、鼻汁も引かけやしません。厭な奴だけれど勤めだから……」といふ如き職業的意識は、てんで持合せないやうですね。そこへ行くと越後の女は、どんなに惚れた客にだつて、達引をするやうな事は決してありませんね、惚れては居るが、客は客だといふ風です、厭な客に對しても矢張り厭な奴だけれど客は客だからと、天井板の節穴を勘定しながらも、勤める所は勤めると云つた風です、或る程度まで一視同仁です。ところが伊勢女となると、同じ一視同仁主義でも、一寸趣きがちがつてゐます。惚れた客に對して

は勿論ですが、惚れない男でも客となれば相當情をもつて勤めろといふ風です。知らぬ女を買ふなら伊勢女に限り、情婦に持つなら東京の女ですよ。越後女は問題になりません。伊勢美人は情が深いけれど、他の客に對しても一視同仁かと思ふと、餘りうれしい氣持のものではありませんからね。惚れた男には飽く迄熱烈に來るが、厭な男は振り飛してしまふ流儀の東京の女が、一番旗幟鮮明で、惚れ甲斐も、惚れられ甲斐もあるやうに思ひますね』と。

伊勢の人自身が、伊勢の女に就て、矢張り同樣のことを云つてるのを私は聽いた。

「名古屋女を空想的な詩的な女性としたならば、伊勢の女は現實を耽美する散文的女性といふべきであらう。その戀は極めて熱烈である。肉繻絆を着て肉體を按じてゐるやうな、遊戯的な眞似は何うしてもできない。薄情な越後女の身代金の高いのに對して、戀に燃え易い伊勢女が、何處の遊廓へ行つても、二割方安い身代金で勤めねばならぬのは、全くこれが爲である。

「油屋おこんは此點に於て、伊勢女の代表者であつた。阿波の大盡を憎んで、福岡貢に熱い戀を許したのも、その心意氣や態度や、善人惡人といふ條件より以上に、貢が肉慾歡樂の美男であつたからである。伊勢女の肉の力は從つて强い。近年伊勢女の代表的美人として、鳴らした、竹本樓の玉川の如きは、朝の九時から翌日曉方までに、男を送迎することじつに五十二人に及んだといふ記錄を有つてをる。

「……けれども伊勢女は決して淫奔ではない、と。

油屋は維新の頃貸座敷を廢業して、今は旅館を營んでゐる。旅館として一流の部に屬してゐるが、何となく陰氣臭い家であつた。古市も遊郷としては、最早殘骸にすぎない、繁榮は疾くに西町方面へ移つてゐた。そこには遊廓が二箇所あつたやうに覺えてゐる。大きな妓樓には內藝妓が抱へてあつて、それが料理屋などへも呼ばれてゆくのであつた。田舍ではよくある制だけれど、私達は最初ちよつとそれを氣付かずにゐた。その時Kといふ男が一緒であつたが、大世古町の或る旗亭で飲んだとき、呼んだ

藝妓は、色の白いぽちや〳〵とした、何ともいへぬ肉感的な女であつた。好き者のKは直ぐ遠まはしに交渉をはじめてゐた。

『宅へ遊びに居らつしやいな。妾みたやうな。お多福でなく、もつと別嬪さんを御周旋しますわ。』

など〵女は云つた。

『宅へ遊びに行つて好いかい？　ほんとうに？』

とKは喜悦斜めならずの態で、歸りにとうとう其の女の家へ行くことになつて、『今夜は君には氣の毒だけれど、つき合つて呉れ』と私に言つた、こいつは少々莫迦〳〵〵しいと考へたけれど、二人は如何なる場合も出處進退を倶にすといふ申し合せに從つて、兎に角私も一緒に從いて行つた。行つて見ると、私が氣を腐らせることは些ともなかつた。その家といふのは、何のことだい、此地で第一流といはれる妓樓であつたのである。

『こら、約束が違つちよりやせんか。』

もう可なり醉つてゐたKは、九州辯丸出しで存外眞面目に女を詰つたが、女はたゞ笑つてゐた。

『あはゝゝ、こいつは一寸赤毛布をやつたね。かうなつたら野暮を云ふなよ。』

と私はKを慰撫して、あつさり遊んで歸ることにした。その女が惡る氣でやつたのでないことは、解つてゐたからである。

旅館へも、藝妓は自由に出入ができた。宴會の歸りに雛妓を宿へ引張つて來て、飲みなほしたりしたことがあつた。その雛妓が翌日の晝間遊びにやつて來て、二時間ばかり五もく並べなどをして歸つて行つた。その時私は番頭をよんで、玉をつけてやるやうにと云つたら、女は自分で遊びに來たのだからとて、固辭して何うしても受け入れなかつた。

『藝妓でも、娼妓でも、通り一遍の旅客だからとて、冷遇するやうなことはない。伊

勢山田は矢張り縞の財布を空にするところである。」

少くも私の經驗した範圍内では、かくいふことが出來るとおもふ。

◇

出雲大社の觀祭樓上に藏せらるゝ奇稲田媛の塑像は、今まで私の觀た美人像の中で一番秀逸なものであつた。次では奈良博物館の技藝天女の像（もとそれは秋篠寺の寶物であつた）であつた。奇稲田媛の像は所謂明眸皓齒、長髪地に曳き、劍を捧げて片足爪立てた樣、實に溫和貞淑を標語とする日本美人の典型的象徴である。ふつくりとした顏を心持傾げて、切れ長な眼をじつと伏眼に、劍を捧げた肩から腕にかけての線のなだらかさ、豊滿な、肉置のよい腰のあたりの曲線、上半身と下半身の均整の好さ——それはまさに振ひつき度い程美しい像、三十二相完具すと云ふに庶幾いものであつた。高天原人種であり漂泊の子であつた素戔嗚命が、此の奇稲田媛を得て「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに、八重垣つくるその八重垣を」と、忽ち此地に定住してしまつたのも、實に所以あるかのやうに思はれるのである。

今日の出雲美人は、奇稲田媛の子孫としては、その美容に於て著しく退化はしてゐるが、尙其の俤を全たく斷つてはゐない。出雲美人は疑ひもなく朝鮮系統である。日本の美人系は、裏日本の出雲に起つて、越前・越中・越後を經て庄内に入り、秋田となり、津輕平野に終つてゐる。確かに、斯く日本海沿岸を走る一脈がある、と私は密かに信じてゐる。少くもかゝる豫測の下に、私の美人研究を進めてゐる、乃ち、私の見解からすると、出雲は裏日本美人系の基點を成すものである。

出雲は神代からの溫柔國である。出雲讓國の神話をきいてみても、高天ケ原から武甕槌、經津主の二武神が大國主命を襲ふた際、總領の事代主命（所謂恵比壽樣）は、御大之崎（今、美保關）三穗媛の所に在つて、鯛などを釣つて遊んでゐたのであつたそして政權などには些の未練もなく『畏し、此國は天津神の御子に奉り給へ』と父に答へて、媛と相携へて其姿を韜晦してしまつた。美保關が有名な溫柔鄕で、町娘など

まで一般旅客に、溫情をもつて臨むもの、全たく事代主の遺訓に基くものだと、彼等自から稱してをる位である。

私の友人で、出雲產であるMは

『山陰を旅行するなら、冬のことだよ、炬燵のある時だよ。』

と常に言つてゐる。私は未だ山陰の冬を知らない。然し北國育ちである私は、わざわざ冬季に出かけなくても、山陰の冬の旅の面白味は凡そ想像することができるのである。雪に埋もれた三箇月は、屋外に仕事がなくて、屋內に炬燵があるのだ、人間は勢ひ淫蕩にならざるを得ない。

藝妓にしても、娘などにしても、金を目的に旅客に溫情を捧ぐると云ふよりも、むしろ自から樂しむの風があつて、可なり旅馴れた者でさへが、往々にして面食ふやうなことがある。——安來に於ける一夜のごときが、その一例である。

尤も、安來は中ノ海に臨んだ船着場で、今は寂れてゐるが、昔は頗ぶる絃歌の盛んな

土地であつたことは、安來節の本場であることや、古人の詩に「十日流連不憶還、八杉灣、別時擧袖掩愁顏、淚潸々」などゝあるので察せられる。私は大社參拜の途上、山陰道に於ける著明な古刹である淸水寺、及び雲樹寺を一見する爲に、安來驛に下車した、一里餘を隔てた處に在る二つの寺を觀て停車場に還ると、次の列車はすでに發車して而も時はすでに正午を過ぎてゐたので、△△館といふ料理兼業の旅館の別館（それは十神山の麓に在る）で晝飯を食つて、午後の汽車で大社へ向つた。故讀賣新聞社長、本野英吉郎と樋口龍峽の三人連れであつた。

歸路私は松江で二人に別れて一足お先きに出發し、美保關へ廻つて一泊し、歸りに安來節を聽かうと目論でゐたので、境で船を乘換へ、中ノ海を橫斷して安來港に上陸つた。例のごとく小舟で別館に送られて、田臭紛々たる、五六人の安來藝妓を招び、安來節をきゝ「どぜう掬ひ」を觀た。

此の家に、女將が、『ゆる子や、ゆる子や』と呼ぶ綺麗な娘がゐた。ゆる子とは珍ら

しい名だと思ふだらうが、實は百合子の出雲音なのである。別館と云ても、二つの客室と湯殿があるだけで、客は私ひとり限り、藝妓が小船に積みこまれて歸り去つた後は、私と女將とゆる子の三人となつてしまつた。――送り迎への船頭は、亭主自身がやつてゐるのだが、藝妓を載せて去つたきり再び來なかつた。

『ゆる子や、お客さまお一人で淋しかろげに……。』

『旦那さん、お淋しかあ、皆で雜魚寢しようかなあ。』

など〻女將も、初めは冗談らしく言つてゐた。雜魚寢などはどこの花柳界でも屢ば行はれることであり、且つはそれを斷るいふことは、却つてわたしが不純な情でも有つてゐるやうにも思はれて、氣恥かしくも感じたので、わたしは彼等の意のまゝに任せた。

翌朝早く、ギーコギーコと亭主が船を漕いでやつて來た。かうした孤島の一軒家に『彼の男の妻とその娘と、三人きりで一夜を送つた』といふ事は、たとひ其れが私の

自尊と自制とに依つて、甚だ平凡に明けたにせよ、兎に角惡い事であるやうな氣がした。何のやうな言懸りを言出されても、私は殆んど辯解の辭が無いやうにさへ、思はれた。

『おい女將さん、船が來たよ。』

船がすでに島に着たにもかゝはらず、女將は平氣で未だうまゐを貪つてゐるのを見ると、私は堪らない不快さをもつて、然う云つた。

然しながら、亭主も亦彼女等のごとく、晴れ晴れとした顏をして、『お早うございます』と、私に挨拶をしてゐた。

若し私が、ドリアン・グレーのやうな男であつたらと、想ひ出すさへ怖ろしい一夜であつた。

◇

『大島へ行かう、髪の長い色の白い女を見る爲に……。』

さう云つて、夏休み冬休みになると、多くの學生などが、伊豆の大島指して出かけた。大島は、野に牛が長閑に群れてゐる島、紅い椿が一杯に咲いてる島である。詩の島。戀の島である。島の女と若い畫師との戀のロマンスなども曾ては屢々傳へられた。

然しながら、今日さういふ企圖を懷いて、出かける者があつても、殆んど皆失望して歸らなければならなかつた。島の女とは、言葉を交すさへ容易ではないのだから……。

『そりや昔は、内地の男といふと、非常に珍らしがつたものですが、今日は餘りに多く來すぎますからね。寧ろ内地の男に對しては、警戒を加へると云つた風がありますよ。』

と大島の男は語つた。

『兎に角島の女は純ですからね。淫蕩な氣分などは、微塵もありませんからね。』

とも云つた。又、

『然し、あんこも此頃は赤い鼻緒の下駄を穿きたがつたり、コツソリ美顏水の香ひを嗅ぎたがつたりするやうに、なりましたでなあ。』

と些か前途を悲觀する如くでもあつた。――但しそんな事は、私達から觀れば、當然すぎる程當然なことなのである。

私はぶらぶらと濱邊へ出た。島の女を觀るには朝夕濱邊へ行くのが一番好いと敎へられてゐたからである。成る程居る、居る、澤山居る。紺の盲目縞の着物に、黑の脚絆を附け、草履を穿いて、頭は頭髮の上から黑又は白の布を、ぐる〳〵卷にした女が假棧橋に二三十人も行列をつくつて、米俵。醬油樽。炭俵の類を、例の頭の上に載せて荷役をやつてゐる。若いのも居る老人もゐる、皆女である。

頭髮はたしかに黑く艶々して、そして、長い。顏の線なども總じてなだらかである。優しくて、情の深さうな女と見える。

島の女は矢張り一種の「働き蟻」である。朝夕の水波みにも、野で肥桶をはこぶに

も彼女等は凡て頭を使ふ。何が詩の國、戀の國だである。

が、然し、彼の紅い椿の林の中で遇つた女だけは忘れることができない。矢張り詩であつた。――それはすでに「踊と唄」の中に書いた。元村には大正亭、松月など呼ぶ小料理屋があり、そこには三味線をひく淪落の女がゐて、盛んに大島節をうたふけれど、何の味ひも變哲もないものだつた。椿の林の中などで、島女の唇から秋の水の流るゝやうにひゞいて來るのを聞かなければ、大島氣分は出て來ない。

大島よりも、三宅島、八丈島と南へ行くに從つて、髪はいよ〳〵黒く、いよ〳〵長く、「島の女」としてのローカル。カラアはます〳〵濃厚となつてくる。

八丈島の女は、大島の女よりも一層純眞にして、且つ美くしい。島の女の美しいと云ふのは、顏の輪廓ばかりを云ふのではない。完全に發育した體格の美しさを見逃す譯にゆかない。

かゝる孤島の中で、不圖みめ美しき若き女性を見ると、私はつねに、ほろほろと、

涙のこぼれるのを禁じ得ない。彼女の美しさを以て、もし、東京。大阪の如き大都會に出でゝ何事をか望むならば、望む所のもの殆んど一として得られざるなき、天の麗質の所有者である。しかも彼女たちは、此の小さな島を總ての世界として、一生の間恐らくは、一歩も島外に踏み出すことなくして、そこに果てるべき運命しか有つてゐないのである。

木履なぶして袖ひづちかめーて
お前な、わそどわか、此雨に。

お前とこげーに松原おげやりや
松の露どう、めなだどう。

或ひは海の波うちよする汀に、牛の群れる山畠に、彼の女らが八丈島まるだしの言葉で、かう唄ふてゐるのを聞くと、それが私には堪らなく、淋しく哀れなものゝやう

にきゝなされるのであつた。

『彼の女たちに、もつと自由な、もつと廣い世界を開いてやりたい。そして他の女性等が普く享有し得ると同じ幸福を、彼の女たちにも配けてやりたい。殊に、美しく生れた者には……。』

私は常にさう考へるのであつた。

女にばかり同情して厭な奴だと、諸君云ふこと勿れ、男は島に生れても、決して島だけがその世界ではない。女は島だけが世界なのである。日本海の飛島の如きは、周回僅かに二里の島である、その二里を世界として、生涯牛や馬の何んなものであるかも知らないで終る女さへあるのである。唯だ周回二里の世界！　彼の女等に取つては、日本が飛島に何倍する國であらうと、また地球が日本の幾倍の面積を有してゐやうとも、其は何の問題でもないのだ。

さて〳〵、話が大分理に落ちた、方向を轉換しよう。

◇

九州では、長崎に美人が集まつてゐる。一體九州は我が美人系からは外れた土地で何處に行つても餘り美人は居ない、唯だ長崎から島原半島、天草諸島にかけて、彼の一區域に若干美人を產するにとゞまる。それ等の美人は多く長崎に集中してをる、長崎は先づ九州の美人國と云つてよい。

元來交通の頻繁で、諸國人の集まるところには美人が生れる。京都、名古屋、新潟など美人の產地と稱せらるゝ土地は、多く古來交通上の要點を成してをつた土地である。今日文化の中心たる東京、大阪に多くの美人が集まり、又美人が生れつゝある事實は、此の傾向を現實に物語つてゐるものである。是は優生學上、一の自然原則と云つてよい。往時支那人、和蘭人、その他の諸外人が集まつて來た長崎は、それ等と日本婦人との混血に因つて、自然に種の改良が行はれたと、觀るのは不當ではあるまい。

島原女・天草女とくると、ちよつと凄く聞える。事實「凄い」女でもあるやうだ。彼

等は美人と云ても、決して名古屋式、秋田式の美人ではない。逞ましい熊襲の骨格を相續してゐる、博多節にうたはるゝ「歩む姿は柳腰」と云ふ如き、嫋々した、腰付は彼等に於て見出すことはできない。從つて其の顏の美しさにも、デリケートな處は少しもない。よく均勢を得た美くしい「肉塊」唯ださういふ感じがする。南洋行きの女としては、彼等は地理的に便利な位置を占めてをつたのみでなく、その體格に於ても、他の凡ての日本婦人に對して、優越な地歩を占めてゐたのである。汽車で島原線を旅する人は、沿道到るところ、或はひろ〳〵とした田畑の間に、或は松の林丘のほとりに、普通〳〵百姓家とは趣きを異にした。小綺麗な三階建の白壁の家を見るであらう。それらは大抵南洋三界を經めぐつて、肉戰情闘十年の旅かせぎから歸つた女が、後半生を暢氣に暮してゐる住居なのである。彼等はすくなくも一萬や二萬の金は持つて歸つてくるさうである。

長崎の丸山廓（今、丸山町と寄合町）は德川時代に在つても、聞こえた遊廓で、『實

や此こそは昔より今に渡り來る唐船・阿蘭陀船、眼色毛色のけじめなく、朝に夕に吳越同舟併せ迎へたる歡樂の巷』であつた。長崎に丸山といふ所なくば、上方の金銀無事に歸宅すべし、爰通ひの商ひ、海上の氣づかひの外、いつ時を知らぬ戀風おそろし……と西鶴も永代藏に書いてゐる。彼の駿河大納言の長子松平長七郎は大阪屋（今の三波樓に）、一代のデカタンぶりを發揮し、平賀源内もだだら遊びに夜を徹し、吉田松陰・高杉東行・坂本龍馬・伊藤俊輔・井上聞多・大隈八五郎なんど、昔て一度は皆此港の美酒に醉ひしれたのであつた。――然し私は、そんなことよりも寧ろ此の港に現れた異國情調、彼のピントコ坂（旻德坂）の傾城塚に依つて語らるゝロマンス、日本の遊女と異國人との情話などに、特殊の興味を唆るのであつた。

傾城塚は、下の如き情話を傳へてゐる。――寛永年中、明の商人旻德といふ者が長崎に來て貿易に從事してゐるうち、丸山筑後屋の遊女登倭に馴染み、月々若干の金を與へて妾としてゐた。然るに旻德は金に詰つて、通貨を僞造したことが發覺して、

斬罪に處せられた。登倭は官に乞ふて曼の屍骸を引取り、自刃して之れに殉したと云ふのである。

斯うした情話は、尙ほ幾つか語りつたへられてゐる。此頃「中央公論」に掲げられた蘭醫シーボルトと其扇との情話の如きも、亦最も興味あるものゝ一つであつた。

當時最とも直接に、最とも親密に唐人や阿蘭陀人と接觸して、風俗、言語、工藝、嗜好、有らゆる方面に東西文化の連鎖を成したものは、丸山の遊女たちであつた。彼國の産物である。「鼈甲、玳瑁の櫛、笄、瑠珍の丸帶、金絲刺繍の襦袢とりぐに、華美燦爛目も綾なる盛裝」を凝らした蘭館行、或は唐館ゆきの遊女は、長崎の花であつた。「長崎の女」は、單だ歴史的に回顧するのみでも、充分興味があつた。然しながら私は今こゝに、さうした歴史的回顧を繰返してゐる閑をもたないのを遺憾とする。

長崎の人達は、丸山のことを單に「山」と稱してゐる。「山行き」は卽ち東京の「吉原ゆき」のことである。都會の遊廓で、傾斜地を成してゐるのも珍らしい。往時、阿蘭

陀人や唐人を客とした丸山の娼妓は、今日も矢張り馬尼剌から避暑にやつてくる米國水兵をはじめ、多くの外人を客として、英語、佛語、ロシア語、支那語と數ケ國語で戀を語つてゐる。廂髪に紋付羽織を着た女や、洋裝をした女やが、此處の特色を語るものである。

私は長崎には二度行つただけで、その一度は大正三年の秋の初め、靑島へ出征する某旅團副官のHを、友人のKとともに見送りの爲に行つたのであつた。三人でさんざん廓内をうろついた揚句に、或る旗亭に登つて、藝妓をよんで午前二時頃まで飲んで騒いだ。Hは、出征者だといふので藝妓達から特別に持てるべきことを期待して居たらしかつた、其は無論吾々も彼の爲に等しく希ふ所であつた。處が彼れは其の割に持てなかつた、それで先生頗ぶる御機嫌斜めの態で、終ひにはスラリと軍刀などを拔いて、藝妓の鼻先へ突付けたりなんかした。

藝妓は眉毛一本うごかさなかつた。又別に啖呵を切る譯でもなく、たゞ「冗談おし

北九州の女

久留米の或る旅館

でないよ、此小僧！。』と云つたやうな顔で、冷然として三味の手をつゞけて行つた。

――京の藝妓なら悲鳴を擧げて逃げる。東京の藝妓なら開き直つて啖呵を切る。そこによくばつてん藝妓の氣分があらはれてゐて、面白いと私はおもつたのである。

◇

北九州の女の、色好みなのにも驚ろく。南九州方面は餘り詳しくないから、斷言はできないが、北九州の方は確かにさう斷言して誤りでない。久留米は純然たる商業都市で、從つて遊びは盛んなところである、人口に比して藝妓の割合が多く、名物「三階陽」などの繁昌によつても、その氣分の一般は窺ひ知られるが、旅館の女中の風儀の如きも、久留米は特に亂れてゐるやうに見える。彼れ等は決して金を欲しがるのでなく、自から樂しむの風がある。此點は出雲地方に酷く似てゐる。名は祕するけれど私は久留米の或る旅館（同市では第一流に屈指せらるゝ）に滯在中、女中一般へ、『私の寢顏に墨を塗り得たものには十圓與る……。』

全くひどい處だ

といふ布令を出して、此の方法で彼等をして相互に牽制せしむることに依つて、辛じて或る一人の奇襲を防禦したことがあつた位であつた。これが唯だ一回の經驗なら、その女が特に私に惚れてゐた結果（へんな咳をするね、君肺病ぢやないかね？）とも解せられるけれど、年を異にして三回行つて、その都度女中は代つてゐても、此の氣分に變りはない。いかに私が好男子（？）であつても、業平の生れ替りではあるまいしさう〳〵女に惚れられる理由はなかつた。

『そいつは面白いね。少しも惡く云ふには當らないではないか、理想的旅館だ。』

など〻友人のTは言つてゐたが、一度その宿に泊つて歸つて來ると、今度は、

『全く非道いところだね。實は五〇プロセントぐらゐの懸値のある話と思つてゐたのだが……。』

文化の低い邊鄙の海岸の或る町とか、山の中の或る町とかには、今も尙さうしたことを職業にしてをる女も居るのだけれど、市制を施いた立派な都市の中にあゝした氣分の横溢してゐる土地と云ふのは、全たく珍らしいね。』

と悉とく感嘆してゐた。

今一つ私は、久留米の藝妓について私の經驗を語ることができる。私が最初に久留米に行つた時、土地の有志者から「丸嘉」へ招ばれて、歡迎會を受けた。そこで其の翌日私は直ちに、その有志者達をまた丸嘉に招いて、答禮の宴を張つた、藝妓なども前夜のうちに特約をして、そつくり其の儘招んだ。そして客が散じ去つてから、私はその藝妓を全部引具して、市街はずれの或る料理屋へ行つて、自分ひとりで二次會を開いたのである。其家は、ひろびろとした田園に向つて眺望が開け、離れ座敷から居ながらにゴロゴロと蛙の鳴くのが聽かれた。然うした靜かな處でゆつくり飲み直したいといふ心もあつたに相違ないが、實は私に一の野心を藏してゐたことは言ふまでもない。

私は何も彼も正直に話す。二夜に亘る宴會に於て、私の心を摑んだ若い妓があつたのである。そして今一人若い妓から『姐さん』と呼ばれてゐる中年增で、土地不案内

の私に對して種々と親切に助言をしたり、世話を燒いて呉れたりした妓がゐた、名は○○と云つた。で私は○○に實情を打明け、彼女を參謀として、目的の貫徹を期したのであつた。――實はさう迄しなくともと云ふ自信は有つたのだが、不案内の土地だから大事を踏んだのである。

その料理屋を引揚げて櫛原町の或る待合へ行つたのは、最早午前一時頃であつた。私は非常に醉つてゐたので、その家に着くや否や、殆んど前後も知らず寢こんでしまつた。夜半渴を覺えて眼をさました私は、驚ろきに打たれた。この家に泊つたのは若い妓ではなくて、○○だつたのである！。』

『おや〳〵、あの妓は何うしたのかい？。』

『あら御存じないんですか、彼の妓はどうしても家の首尾が惡いと云つて、承知しないんですもの、それぢや引請けた私の顏が立たないと云つたら、濟まない〳〵つて終々泣き出してしまつたんですもの。』

『それで君が身代りになつて呉れたといふ譯かい？。』

『ほほほう。……あなたが左樣仰在つたんぢやありませんか。』

種々と前後の事情を綜合してみるのに、彼女が最初から一種の野心を藏してかゝつたのか、或ひは彼女の曰ふ如く、私の失望を慰める爲に、進んで犧牲となつたものであるか、そは甚だ疑問であつた。彼女が一種の責任感の上から、犧牲になつたものとすれば、其は可なり徹底した犧牲ぶりであつた。何故ならば、翌朝二人で朝飯まで食つて、その家の勘定書は二圓何十錢といふ、驚く可き少額、――彼女が全く職業氣分を離れてゐた事の明白であつたからである。

かう云ふ未曾有の喜劇事件に直面した私の複雜な心理狀態を、こゝに小說的に叙述する必要はない。唯だ本章冒頭に掲げた「北九州の女の色好み」を力強く立證する一事件として、私は掲げたに止まるのである。

◇

以上、談片的に、地方的美人に關する私の見聞を錄したにすぎない。我が國に於ける美人の分布狀態及びその特色等に就ては、私は目下尙ほ研究中なのである。系統的科學的に、研究してみたいとおもつてゐるのである。未だ曾てそんな餘計なことを試みた人は居ない。私とても亦、決してそんな事を專門に研究する爲に、旅をつゞけてゐる譯ではない、唯だ研究項目の一に加へてあるといふにすぎないのだが、私の研究項目の中では、可なり困難な仕事の一つである。所謂「美人系」、――美人の分布に就ては、歷史的に研究を進めて行かなければならない、北の方から來た先住民族と、南の方からやつて來た高天ケ原民族とが、どんな風に交雜して、此の國土に分布したかに就て、先づ考察して見なければならぬ、其後に於て發生した種々の小さな事件についても、相當の考察は拂はれなければならない。これが系統的研究の體系である。

一面に於て又私は、各美人系――、例へば京美人、名古屋美人、新潟美人、秋田美人などいふものに就て、各その特色を見出す爲に、唯だ我々の漠然たる觀察からでな

く、的確に、具體的に說明する爲に、多數の同一地方の婦人に就てコンパウンドした複合寫眞を作製しつゝある。面貌は勿論、その全體の體格美についても……。此の仕事は特に困難を感じつゝある。伊豆の大島、八丈島等の如く、古來外來の移住者が少くて、島內に現住せる女は卽ち總て生粹の「島の女」である地方に於ては、仕事は甚だ簡單であるが。新潟、名古屋、秋田など交通と混血との盛んな地方では、モデルの選擇上に、相當の困難が橫はつてゐる。無論「名古屋美人」「新潟美人」等、皆それぞれの特色があつて、その特色の著しい者は、『是は標式的の名古屋美人だ』『此の女は新潟美人の典型的なものだ』と云つて、多勢の中から摘出することは、敢て困難なことではない。從つて新潟に行つて、標式的な新潟美人を五六人も撮影して、それをコンパウンドすることは、比較的容易な事業であるが、其は恰も豫め答案を認めて置いて、問題を提出するやうなものである。

私の企圖は、全然別な方面に存する。乃ち我々が觀て「典型的新潟美人」となす者

と、廣く深く越後婦人の間にモデルを求めてコンパウンドして得た複合寫眞との間にどれだけの差があるか？　我々の肉眼では容易に鑑別し得られないものを、數學的に發見しようとしてゐるのである。行程はすでに半ば近く迄に到達してゐる。遠からず諸君の前に、私の新しい報告書を提出することが出來るであらう。

舌が旅をする　（をはり）

大正十三年七月一日印刷
大正十三年七月五日發行

珍味を求めて舌が旅をする

（定價金貳圓）

著者　東京市外世田谷町地尻一四六　松川二郎

發行者　東京市本郷區弓町一ノ二五　茅原茂

印刷者　東京市神田區表猿樂町十三　樫村功

發行所　東京市本郷區弓町一ノ二五　日本評論社
振替東京九六七八
電話小石川一九七一

▽藝術の話　山內房吉著　價一・二〇　送一・一三〇
▽商業から見た歐米都會見物　清水正己著　價一・八〇　送一・一三〇
▽自由主義發達史　平林初之輔著　價・八〇　送・六
▽論理の話　安島健著　價一・二〇　送・一三
▽財界樂人新人と舊人　朝日新聞經濟部編　價一・八〇　送・一五〇
▽新聞雜誌の作方と讀方　住谷成一著　價一・八〇　送・一五〇

▶大正十三年發行圖書目錄◀

▽店員訓練及待遇法　新山虎二著　價一・二〇　送・〇八
▽流行の見方及流行品の賣方　蘆川忠雄著　價一・二〇　送・〇八
▽政治家のからくり　吉野鐵拳禪著　價一・八〇　送・一三
▽最新陸上競技法　寺田瑛著　價一・八〇　送・一三
▽建築の話　大澤秀二郎著　價一・二〇　送・一三
▽人間の由來　ダーウキン著　大畑達雄譯　價三・〇〇　送・二七

▽エスペラント教科書　石黑修著　送價〇・五四〇

▽日露會話獨習　山內封介著　送價二・五〇　一・一三〇

▽バックハンドの研究　東京商科大學庭球部編　送價一・八〇　一・一三〇

▽體驗圖解自彊術講話　吉野甫著　送價一・三〇　一・一三〇

▽新東京繁昌記　水島爾保布著　送價一・八〇　一・一五〇

▽世話童話名作選集少年詩人の旅　水內房吉譯　送價一・八〇　一・一三〇

大正十三年發行圖書目錄

無駄な苦しみと時間を省く

▽國語の新しい學び方　中村八郎著　卷七・四〇　卷九・四〇　卷十一・四五　送料・〇四

既刊分尋常小學國語讀本卷七・卷九・卷十一

▽大震災經濟史　時事新報經濟部編　價三・〇〇　送料・一八

▽音樂の一般的知識　杉浦躬行譯　價一・六〇　送料一三

▽趣味と實益の泉今日の科學　理學士大久保昶彥著　價一・七〇　送料・一三

▽歷史の話　長谷川猪三郎著　價一・二〇　送料・一三

大正十三年發行圖書目錄

▽朝鮮支那の卷 **繪の旅** 石井柏亭著 價三・〇〇 送料・一八

▽支那を旅して **日本を見る** 木村莊八著 價二・四〇 送料・一五

▽**草の夢** 與謝野晶子著 價二・〇〇 送料・一八

▽**青水沫** 窪田空穗著 價二・五〇 送料・一五

▽**白帆の夢** 赤木毅著 價二・五〇 送料・一五

▽**路行く人々の歌** 若山牧水著 價二・二〇 送料・一五

528
41

13年12月2日

[illegible]	[illegible]	佐竹	佐竹	[illegible]	伊佐				

終